

経済学の知識・方法、歴史的な視点を基礎としながら、金融、社会保障、地域経済などの具体的問題を学ぶ経済学部経済学科から、江里口拓教授の「演習I(22)」と小出秀雄教授の「演習I(11)」を紹介します。

今回の
学科は

「経済学部 経済学科」

学科
フォーカス
No.21



積極的に何をしたいのか考え、自分から学ぼうとする学生には徹底的に付き合います。アドバイスが欲しいという人は遠慮なくぶつかってきてください！



「知りたい」という意欲と主体的な姿勢を尊重

ゼミのテーマは「持続可能な社会を構成する循環型社会と低炭素社会」。学生にとっては少し難しいテーマかもしれませんが、経済学部でゼミで扱うのも珍しい。しかし、環境と経済とは切り離せない関係にあります。最初は興味があっても、ゼミの活動を通して環境問題に目を向けるきっかけになればと思っています。そこから自分の興味があることを見つけ出し、追究していくのがゼミの目的です。環境問題に限らず、情熱を持って取り組めることならテーマは自由。与えられるのではなく、自分で選ぶことが大切です。「知りたい」という意欲と、主体的に取り組む姿勢を尊重します。

3年次はテキストを輪読し、環境経済への関心を高めます。4年次はテキストをより深く読み込み、卒論執筆に備えます。個人やグループでの研究発表を通して理解したことを自分の言葉で伝える能力を養うとともに、プレゼン

のスキルや有意義な議論の方法を身につけます。

頭と体を動かして生きた知識を学ぶ

環境問題は多岐にわたるので、閉じたゼミで得られることは限られています。座学も必要ですが、頭と体を動かして、生きた知識を身につけてほしい。そこで、対外的な活動を積極的に取り入れています。

たとえば2012年から実施している「福岡超大学環境ゼミナール（ふくお環ゼミ）」では、福岡大学や九州大学など5大学6団体が参加し、大学や専門分野の垣根を超えて意見交換をしています。イベントや施設見学会では学生が企画から関わり、準備や運営に携わっています。ゼミは一般公開しており、社会人も一緒に学んでいます。互いに良い刺激になります。学生にとっては社会を学ぶ絶好の機会です。



小出 秀雄教授

一橋大学大学院博士課程単位取得退学。博士（経済学）。専門分野は環境経済学、環境政策。主な研究テーマは廃棄物処理と資源リサイクルに関する理論的分析・事例研究、学生の主体性を引き出す産学官民連携。

「気軽に、積極的に」といっても最初は難しいかもしれません。まずは取り組んでみてください。『やってみたら意外と面白かった』と感じてもらえたら嬉しいです。

社会人基礎力を培うための下準備は1年次の基礎演習から始めています。浜浜商店街の活性化に取り組む人々を応援するプロジェクトでは、商店街のイベントのお手伝いをしながら地域の課題を自分たちで発見し、解決するのがねらいです。今後、「ふくお環ゼミ」に続くプロジェクトとして発展させていくつもりです。

学生には、周囲の人と気軽に、積極的に交わり、協力して物事を進めていく「社会人基礎力」を身につけてほしい。一人ひとりの力は小さくても、周囲の協力を得られれば、大きな力になります。さまざまなバックグラウンドを持つ人々と目標を共有し、意見を交わすことで自分の役割が見えてくる。社会に貢献できるのだという手ごたえを得ることができればいい。

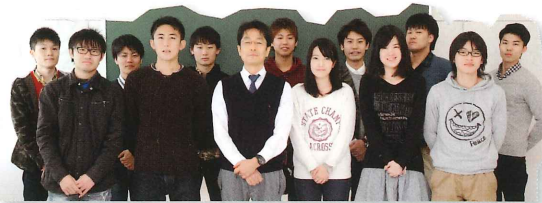
気軽に周囲と交わり社会人基礎力を培う

演習I(11)ってどんなゼミ？

社会に開かれたゼミで多くの人と関わり、自らやるべきことに「気づく力」を養う。



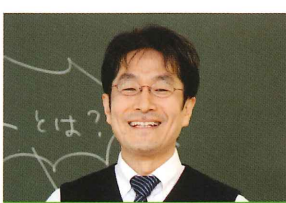
ゼミの学びを通して、他者の思考や立場を尊重できる「思いやり」を持った社会人になってもらいたいと考えています



テキストを読んで覚えるだけでは知識にかなりましませんが、学生のモチベーションも上がりません。この知識を生かすには、知識と知識をつないで吸収したものを言葉にして「話す力」、ディベートで自分の意見を述べるのが大切です。たとえ無意識な発言でも、過去の学説で誰かが言っていたことと同じだと気づいたり、話すことで意味が生まれ、自分の思考の礎となります。また、聞き手側も発言の意味をくみ取ろうと努力

ディベートを続けていくためには最初のテーマ設定が重要です。経済思想史を学び始めたばかりの学生にとっては手探りの状態ですが、基本的に私はテーマを提供しません。学生自身が興味を持ったテーマを調べるからこそ、ディベートに向けて発言者はテーマを深く追求し、聞き手も責任を持って質問やアドバイスをする、という良い環境が生まれるのです。

ゼミは2年次の12月には確定し、4月からはグループ作りが始まるので、あらかじめ文献を調べるなどテーマを決める準備をしておく必要があります。また、ゼミでも漠然としたテーマがディベートの内容を反映して徐々に深まっていくよう、最初の頃は5分間のプレゼンと10分間のディベート、第二段階では7分間のプレゼンと8分間のディベート、最終



江里口 拓教授

九州大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。博士（経済学）。専門分野は経済思想史、経済学史。主な研究テーマは公共政策の経済思想史、福祉国家の経済思想史など。

自分にはまだ知識が足りないからと、必死で知識量を増やそうとする学生もいますが、大切なのは物事の本質をつかむ力、「考える力」を持つことです。考える力はディベートの中で、なぜ自分が学んでいるのか、学びから何を見つめられるのかを客観視することで育ちます。考える力さえ備わっていれば、知識は後からついてくるものです。経済思想史をツールとして現代の経済を思考する、というゼミでの学びを通して、学生たちにコアとなる思考力を身につけてほしいと思っています。

知的には10分のプレゼンと20分のディベートと、進むにつれ時間が長くなるようにしています。

知識に偏るのではなく、社会にコミットする思考力を育てる。

「演習I(22)」ってどんなゼミ？

ディベートで「考える力」を鍛え広範な思考で社会にコミットできる人材を育てる。

知識と知識をつなげて「話す力」を訓練し、思考力を高める。

経済思想史というのは経済学者の学説を知り、その歴史を研究する分野です。歴史に関心を持つことは重要ですが、過去の経済学者が考えたことを知るだけではなく、それが現代の経済にどのように応用できるのか、というところまで思考することが求められます。そのためのトレーニングとして、私のゼミではディベートを重視しています。

ディベートを続けていくためには最初のテーマ設定が重要です。経済思想史を学び始めたばかりの学生にとっては手探りの状態ですが、基本的に私はテーマを提供しません。学生自身が興味を持ったテーマを調べるからこそ、ディベートに向けて発言者はテーマを深く追求し、聞き手も責任を持って質問やアドバイスをする、という良い環境が生まれるのです。

ゼミは2年次の12月には確定し、4月からはグループ作りが始まるので、あらかじめ文献を調べるなどテーマを決める準備をしておく必要があります。また、ゼミでも漠然としたテーマがディベートの内容を反映して徐々に深まっていくよう、最初の頃は5分間のプレゼンと10分間のディベート、第二段階では7分間のプレゼンと8分間のディベート、最終